

## 「霞ヶ浦導水事業の検証に係る検討報告書（素案）」に対する関係住民の意見聴取

平成 26 年 3 月 4 日（火）10:03～10:12

霞ヶ浦導水工事事務所 2F 第一会議室

発言者：意見発表者 6

私が霞ヶ浦導水事業の検証に係る検討報告書に対するパブリックコメントについての意見陳述の意見を出したのは、3. 1. 1. 1にある水質浄化、3. 1. 1. 2の流水の正常な機能の維持についてということで意見を出しました。意見はこちらの資料にもありますけれど、水質浄化のために霞ヶ浦では様々な策を講じてきたが、その現状は30年間ほぼ横ばい状態であり、水質浄化には至っていない。今までの施策が間違っていたというよりも人口増加に伴う水質への負荷の増大が浄化を困難にしていたのだろう。そこで、霞ヶ浦導水事業の登場である。この事業を完成させて、新規の流入河川を設けることで、湖水の滞留時間の減少と流水効果による水質浄化の可能性が見えてくる。霞ヶ浦の水は流域100万人だけではなく、近隣の都県民にも供給される実情を考えれば、霞ヶ浦の水質浄化は国民の公衆衛生と、命を守るという大きな役割に気付くはずである。流れる水こそ命をはぐくむ。霞ヶ浦の水を動かすこと、これが重要である。というのが私が提出した意見です。

この、意見をまとめるにあたって、自分で経験してきたことを少しお話ししたいと思います。霞ヶ浦に移り住んで22年が経過しました。その間に霞ヶ浦の水環境変化の様々を釣り人目線で見てきました。年々魚が釣れにくくなっているのを実感しております。私が思うにCODやBODが水質のバロメーターで登場しますが、この値は水の透明度には直接結びつきません。その証拠にこれらの値が上昇しなくても1999年から確認された湖水の白濁化はその後ますます強まっていきました。白濁化後はあれほど大量にいたペヘレイが減少しワカサギの漁獲量も急激に減りました。また、この白濁により2枚貝が減少しその貝を産卵床とするタナゴ類やビワヒガイも激減しました。これは、白濁化により太陽光の水中透過量が減少してプランクトン類の発生を抑制したからだと思われます。この白濁化を消し去ったのは大型台風による大雨、そして霞ヶ浦の大増水でした。それも何度も霞ヶ浦に襲いかかり、それまで滞留していた湖水をそっくり入れ替えるほどの流れを作ったのです。白濁化が解消されるとその後はワカサギが豊漁になりました。ペヘレイも戻ってきました。タナゴ類も少しずつ増えているような現在であります。これらの事実を考えますと透明度の上昇こそが霞ヶ浦の水質浄化の重要な解だと考えます。同時に透明度を上昇させる1つの方法に流水による効果が考えられます。

個人で池を持っています。6m×18mの長方形の池で水深が1mほどあります。池の名前は、小さな池から湖が栄えると書いて「小池栄湖」という名前です。2004年に完成したのですが、造った当初はモーターを使った流水装置がありました。このときはエビモやヒルムシロ、トチカガミなどの水生植物が池を埋め尽くすほどに繁茂しました。透明度は夏でも7、80cmはありました。しかし、この装置が壊れた2008年頃からは水が滞留して透明度が徐々になくなり水温が上昇すると植物プランクトンが異常発生し、池はアオコに覆われました。水生植物もヨシとガマだけになりやがて透明度は5、6cmもないほど緑色に濁りました。今年の夏は淡水赤潮まで発生するほどに悪化しました。今年の10月、仲間たちと水中ポンプを購入し、池の水が毎秒4リットル動くような装置を作りました。すると徐々にではありますが、池の水に透明度が戻ってきました。たった5ヶ月で水の色に変化が出たのです。透明度は以前の倍の20cmになりました。すると低水温期であっても魚たちが動くようになりました。今年の厳寒期でも魚たちが良く釣れたのが証拠です。これは、太陽光が深い水深にまで届くようになって

たからだと思います。また霞ヶ浦では減少しているマルタニシが増えました。モノアラガイは無数に発生しています。二枚貝も増えているようです。これらの全てが水の透明度の上昇に伴う太陽光の影響力だと思っています。

このように滞留している水を動かすことで水の透明度を上昇することができました。すると水中の様々が変化していきます。この池には、まだ沈水植物は繁茂していませんが、循環水の2次浄化槽として使っている1m×2m水深40cmのプールにはトチカガミやクロモ、エビモ、ガガブタなどが低水温期にもかかわらずすくすくと育っています。これはこのプールの水深が浅いので太陽光が届いているからでしょう。そこで希望的観測ですが、今年の春には池にも水生植物が生えると思われます。やがて以前のような藻だらけの池になることを期待しています。このような素人によるまねごと実験であっても、流水の効果は目を見張るほどでした。「水を動かすことは水を生かすことにつながる。」そう考えるようになったのは当然の成り行きでした。

そこで霞ヶ浦導水事業が完成し運用されるようになると最大で15m<sup>3</sup>/sの水が流入するようになるとあります。15m<sup>3</sup>/sの水の量がどれほどなのかは想像ができませんが、莫大な量であることは予想できますし、霞ヶ浦の水質を大きく変化させる力を持っていると感じております。ちなみに霞ヶ浦に流入する代表的な河川の平均流量を調べましたら桜川の流入量が8.81m<sup>3</sup>/s、恋瀬川が3.74m<sup>3</sup>/s、小野川が1.78m<sup>3</sup>/s、巴川が2.91m<sup>3</sup>/sとありました。つまり霞ヶ浦導水事業とは霞ヶ浦に新たな河川の流入口を設ける事業であり、この流動する水の力が霞ヶ浦の水質浄化に大きく役立つと私は考えるのです。

流水が水の透明度を上げ、沈水植物を増やし植物プランクトンの増加を抑制する大きな力となることは千葉県手賀沼に設置された北千葉導水路をご覧になれば簡単に予測できます。過去には長い間、水質ワースト日本一だった手賀沼が、今では見違えるほどきれいになっているのです。ちなみに北千葉導水路の最大流水量が40m<sup>3</sup>/sで手賀沼の浄化水量は7m<sup>3</sup>/sだそうです。そこで15m<sup>3</sup>/sの水が霞ヶ浦に流入すれば霞ヶ浦の水の入れ替えが現在の年間2回から3回になるという試算でした。これが水質浄化にとって大きな力になることは疑いのないことだと思います。でも、できることなら年に4回とか5回の入れ替えを願う次第です。

いずれにしましても霞ヶ浦導水事業が早期に完成し、那珂導水路が早期に運用されることによって、首都圏の生活用水の確保と霞ヶ浦の水質浄化がより早く進むと思います。阪神淡路大震災や東日本大震災などに加え、いまだに大きな爪痕を残している先日の南岸低気圧などによる自然災害に備えて安全で安心な水の確保は国が取り組むべき最重要項目の1つだと考えます。

2008年1月に開催した、高浜の湖岸清掃の終了後に霞ヶ浦導水事業那珂導水路勉強会を催しました。このときより霞ヶ浦導水事業の重要性をより深く知り、その後、高浜機場前の清掃活動を霞ヶ浦河川事務所や石岡市と連携して毎年行っています。すべては霞ヶ浦導水事業那珂導水路を迎え入れる準備としての活動であります。

それほど霞ヶ浦導水事業は霞ヶ浦の住民にとって期待されている事業であることをお話しし、私の意見陳述を終了致します。